

創業の幕明け

三郎は、昭和八年それまでの丸善薬店を辞めて、天王寺区上汐町にある岡本塗料製造所に勤めることになった。

私の回顧録
小島 二郎

十五歳の時である。丸善で落度があったわけではなかったが、或る日のこと主人から、「家の方が困ってるらしいが、ここにいてるよりもっとお金がとれる工場へでも行っ

た方がよいのと導うか」と言われたからだった。父が事業に失敗し一家離散になっていただけに、多分、父が兄が金の無心を書いてきたのでは、と三郎は思ったからである。

岡本の近くには、親戚に当る、前年に亡くなった母の妹一家、平塚家があった。その叔父と岡本

15歳の時岡本塗料へ

素封家「きく」に好意もつ

の主人とは近所でもあり友達でもあるそんな関係だった。時々、平塚の三女良子が「さぶちゃん」と言っただけに、二、三年だったと思う。岡本は二ス塗料の製造を業としていた。

まえさんが、番頭の石原さんと結婚することになった。向いの南原家具店の店員さんの世話と聞いた。三郎ときくの初めての出会いである。この時は、まさか二人が結婚するなど思ってもよらなかった。

へ変ることになったらしい。ある日の休日、三郎は、椎寺町を二人連れで歩くきくとパツタリ出会ったことがあった。きくは、その時のことを数十年たった後までも覚えていた。

ていた。と話すのだった。がそんなことを互いに知りながら、いつかとして好意をもつようになったかは忘れてしまったが。

くがしてくるようになってきたのを抱かしている。がその前に「わしの嫁さんにならんか」と冗談でもなし、本気でもなしに言ったのが先だったか。

かくして、人目を避けるようになればなる程人目につくみたい。が、いずれは徴兵検査があり戦地へ行く身、それまでのこと。と言った気持で周明の人からは見られていたと思う。

年のこと。三郎は盲腸で、上本町にある日本赤十字病院へ入院した。初めての病気で、手術も順調にいそ十日ばかりで退院した。すると店に、新入りの女中さんが見えていた。名は「きく」と言う。

河芸郡板本村だった。小学校を出ると、村出身の素封家の一つである。泉佐野にある加藤医院へ奉公に出たりし又、谷町にある帯揚げなどを商いする店へも出ていたよう

で、そこで、店員のひと仲良くなり居づらくなつて、その店員と南原家具店の若い人とが友達だった、そんな口添えて岡本

一人でする時などは、よく玉子を出してくれた。三郎の方も、早くから母親に死別していただけに、なんとなく、母親への甘えにも似た感情をもつようになっていたようにも思ったりする。

人目を避け逢引き



昭和12年頃の岡本塗料の一行
向かって前列右から2人目が三郎
同、後列右から2人目がきく